Osaka University Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞『「人格」という形式』
Author(s)	前田, 秀明; ニクラス, ルーマン
Citation	メタフュシカ. 2006, 37, p. 115-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7594
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【翻訳】
「人格」という形式

ニクラス・ルーマン / 前田秀明訳

Ⅰ.

近代文学は、人格という特別な概念を保持するつもりも、あるいは、古代の伝統によって人格と人間を区別するつもりさえほとんどないようだ。人間は主体であり、主体は個人であり、個人は人格である（しかし、「である」とはどういうことだろうか）ということは、自明なことと見なされている。おそらくこの様な概念の融合は、近代世界において個人は自己観察によって定義され、自己観察は精確には自らの観察の観察として、すなわち、二階の観察〔Beobachtung zweiter Ordnung〕として理解されなければならないということと関わりがある。(訳注 1) この場合、古代世界の存在論的、動物的、あるいは、人格に関して言えば法的な諸区別は、実際ほとんど意味をなしていない。ドイツ観念論およびロマン主義の用語法では、それらの諸区別は「野蛮な」こととして、つまり動物に関係づけた区別として非難されるに違いない。

その代わりに、別の諸区別が問題となっている。とりわけ今日個人は、彼にとって心地よいものであれ煩わしいものであれ、いずれにせよ要求される「社会的アイデンティティ」から区別され、主我〔I〕は客我〔me〕から区別され、あるいは、それ自身だけでただ断片的にまた状況的に与えられた自我は、社会的予期を満たす様に規範的に仕上げられた自我から区別されるが、この社会的予期は特に、自我が自己自身と同一であり続けなければならないということに向かっている。[1]〔自我についての〕この二重の見方は、心理システムと社会システムの境界づけをする際

---

[1] これに関しては、ウィリアム・ジェームズ、ゲオルク・ジンメル、ジョージ・ハーバート・ミードの様な著者が重要である。最近の叙述はほとんどミードにのみ依拠しているが、それらに関しては、Lothar Krappmann, *Soziologische Dimensionen der Identität: Strukturelle Bedingungen für die Teilnahme an Interaktionsprozessen,* Stuttgart, 1971 を見よ。また、それ以降はほとんどこれらの著者に関する叙述ばかりで、問題に関する叙述はなく、そのことが広範囲にわたる理論活動の放棄へとつながっている。

(訳注 1) 「観察〔Beobachtung〕」は、後出の「言及」と重なる意味をもつ概念である。「観察」においては、あるものと他のものとの区別による形式が、情報を獲得するために用いられる。ここで、ある観察者が自らの観察自身を観察することが「自己観察」と呼ばれ、それは当初の観察が一階の観察であるのに対して、二階の観察であると見なされる。本文においては、意識がシステム理論的に観察として把握され、近代においては個人が自己意識すなわち自己観察によって定義されるということが言われている。下記の（訳注 2）、（訳注 5）、および、（訳注 6）を参照のこと。

に問題となる。もし心理システムと社会システムの区別を重視し、しかも、それらがそのつど作動上閉じていることを重視する理論に向かおうとするならば、より高度な解決能力をもつ理論を探す様に忠告を受けることになるだろう。

沢山ありうる手始めのうちの一つは形式概念の再定式化であり、形式概念を統一概念から差異概念へ変換することである。このことはとりわけ、自我と自己、人格的アイデンティティと社会的アイデンティティ、個人と人格について語られうる仕方に関わる。ジョージ・スペンサー・ブラウンの形式算法から借用することができる提案に倣えば[2](訳注2)、形式とは境界をマークづけすることであり、その結果二つの側が生じ、そのうち一方の側だけが更なる操作〔Operationen〕(訳注3)のための連結点として使用されることができる。その際、他方の側へ移行することは不可能ではない。しかし、この移行はある特殊な操作を必要とし、それ故時間を要し、また、同一の側に留まり続けそちら側の表示〔Bezeichnung〕を圧縮し再認するだけの場合に生じることからは区別されるということが、論理的に含意される。[3](訳注4) したがって、形式はつねに二つの側をもつ形式である。形式は形式としてつねに一方の側においてのみ（したがってつねに不完全にのみ）使用されることができる。しかし、観察者が形式を二つの側をもつ形式として見る場合のみ、観察者（それはまた形式の使用者でもあり得るが）は形式を見ることができるということも、同様に正しいことになる。

この様な形式概念から出発して、「人格」という形式はいかに記述することができるだろうか。ここで問題となる区別は何だろうか。

Ⅱ.

まず初めに、心理システムと人格を明確に区別しなければならない。なぜなら、(我々の理論の)

---

[2] George Spencer Brown: *Laws of Form,* Neudruck, New York, 1979〔邦訳 G. スペンサー＝ブラウン『形式の法則』、大澤真幸・宮台真司訳、朝日出版社、1987 年〕を見よ。

[3] Spencer Brown, *a.a.O.,* S. 1f.〔邦訳 G. スペンサー＝ブラウン、前掲書、2 頁〕は、「呼び出しの法則〔the law of calling〕」と「横断の法則〔the law of crossing〕」を対応させながら区別している。

(訳注2) 当論文の題名にもある「形式〔Form〕」とは、本文にも記されている通り、スペンサー＝ブラウンから借用された概念である。スペンサー＝ブラウンはその独創的な形式算法を、まず空間に「区別〔distinction〕」を設けることから始める。区別を設けるとは、例えば平面において円を描く様に、境界を配置して空間を二つの側に分けることであり、その結果、一方の側にある点は、境界を横断することなしには他方の側に到達することはできなくなる。そして、その様な区別によって識別された状態に、区別されていることを示すマーク「┐」がつけられる。ここで、何らかの区別によって分割された空間が、その空間の内容全体と併せて、その区別の「形式〔form〕」と呼ばれる。この様な区別による形式が組み合わされ、計算が行われていくこととなる。

(訳注3) Operation には、システムにおいては「作動」の訳を当てたが、ここではスペンサー＝ブラウンの形式算法における意味で用いられているので、「操作」と訳しておく。

(訳注4) 「圧縮する〔kondensieren〕」と「再認する〔konfirmieren〕」は、スペンサー＝ブラウンによる形式算法からの概念である。スペンサー＝ブラウンは上記の「区別」を定義した後、「呼び出しの法則〔the law of calling〕」と「横断の法則〔the law of crossing〕」という二つの公理を提示する。「呼び出しの法則」とは、「2 度の呼び出しのもつ値は、1 度の呼び出しのもつ値である」というもので、区別がマークされた状態について、それを表示する名前〔name〕を 2 度呼ぶことは 1 度呼ぶことと同じであるということである。このことは、記号的には「┐┐＝┐」と表され、ここで「┐┐→┐」と単純化することが「圧縮〔condensation〕」、「┐→┐┐」と複雑化することが「再認〔confirmation〕」と呼ばれる。また、「横断の法則」とは、「2 度の横断は、横断の値をもたない」というもので、区別における境界を 2 度横断することは、横断しないことと同じであるということである。このことは記号的には「╕＝　」と表される。

〔心理システムと人格における〕両方の言及〔Referenzen〕(訳注5)にとって、異なる形式概念が問題となるからである。

心理システム〔の形式の考察〕については、自我 / 非我、あるいは、内 / 外の区別から始める伝統を何よりもよりどころにすることができる。もちろんそのことは、この様な区別を生み出す外部の観察者を前提とした。確かにフィヒテはこの問題を自我自身に関して解決しようと試みていたが、それについて現実に説得的な議論ができなかった。自我は自己自身への外部の（その「外部の」ということを、ロマン主義者は「冷静な」「思慮深い」と言った）観察者になった。その際すでに、心理システムが自らの形式のもう一方の側、つまり外側、すなわち世界をもつということは明らかであった。その際不明であったのは、システムはいかにして内から外に到達し、一体いかにして世界から知識を受け取り、世界に対して行為できるのか、ということであった。今日それは言及の問題と呼ばれるが、それは未解決のままであった。もしかするとこのことは、外部の観察者に依存していることと関連しているかもしれない。この理論においては、いかにして外部の観察者が他のシステムに関する問題を解決するのかということを知ろうとすれば、ひとは外部の観察者を観察しなければならない。哲学者は哲学研究者に、哲学は哲学史に、理論は理論の記述になる。 ―そして、設定される問題は二階の観察の水準、観察者の観察の水準に移される。

このことは、ここで批判されたり取り消されたりするべきではない。しかし、理論自身をこのことにより良く合わせることはできる。哲学には、くだけた言い方をしてもよければ、外部の観察者としての哲学に生じたことが生じただけである。システム理論はこの問題を「再参入〔re-entry〕」の図〔Figur〕によって解決する。[4](訳注6) システム理論は形式の中への形式の再参入を、したがって、区別の中への区別の再参入を表示する。システムの場合は（我々は心理システムに関わっているのだが）、システムの中への、システムと環境の差異の再参入を表示する。システム形式の場合については、形式の中への形式の再参入は、自己言及と他者言及の区別によって表示されることができる。したがって、一般的な「言及」の問題というものはなく、つねに自己言及と他者言及という二つの側をもつ形式、および、その両側間での繰り返しか横断のみがある。その際作動〔Operationen〕はつねに内部の作動のままである。外に介入することはない。システムは作動上閉鎖システムとして働く。システムは自己自身のみを変形することができる。つまり、

---

4 同様に、Spencer Brown. *a.a.O.,* S. 56f., S. 69ff.〔邦訳G. スペンサー＝ブラウン、前掲書、65頁以下、79頁以下〕を見よ。

(訳注5) 「言及〔Referenz〕」は「準拠」とも訳され、社会学においては「準拠枠〔frame of reference〕」という用語で一般的に用いられてきた概念であり、パーソンズは「行為の準拠枠」という用語を使用する。ルーマンはこの「言及」という概念を、スペンサー＝ブラウンの形式概念に基づいて解釈し直した。彼によれば、「言及」とは「区別〔Unterscheidung, distinction〕」と「表示〔Bezeichnung, indication〕」からなる作動であり、他のものから区別した上で、あるものを表示することである。システムの言及においては、システムと環境が区別され、そのどちらかが表示される。そこでは、システム自身への自己言及と環境への他者言及が区別されていることになる。

(訳注6) 「再参入」は、スペンサー＝ブラウンによる形式算法において用いられる概念である。本文にもある通り、ある形式の中にその形式自身を更に導入することが、「再参入」と呼ばれる。例えば、平面上の円という形式においては、その円の内側か外側に更に円が描かれることになる。システムにおいては、形式はシステムと環境の区別からなるので、システムと環境の区別自身が、システムないしは環境の中に再参入する。ここで、システム理論においては、形式に基づいて観察が行われるとされるので、形式の中への形式の再参入とは、形式に基づく観察の観察という二階の観察であることになる。

システムがそれによって自らの観察を可能にしている区別だけを変えることができる。そして実際そのことは知られている。すなわち、思考は外界において何も変えず、自己自身を変えるだけである。

それ故、次の様に言うことができる。すなわち、心理システムの形式は、自己言及と他者言及の区別である、と。[5]このことは、たとえ別の定式においてであるとしても、フッサールの現象学の中心命題であった。すなわち、意識と現象はフッサールにとって一つの同じ実在であり、「志向〔Intention〕」とはこの様な統一を表現する概念であり、したがって、意識の形式概念である。[6]それ故、自己言及と他者言及の区別に関わり、観察されるシステムがいかにその区別と関わる〔damit umgeht〕のか見ることができる場合にのみ、心理システムは観察されることができる。(「関わる」とは次の様なことを意味する。すなわち、繰り返しと横断においてどの様な構造が圧縮されるのか、何が確定されるのか、あるいは、繰り返しては使用しないことによって除外されそれ故忘れられるのか、そしてより根本的には、他者言及と関係している自己言及はシステムの日常的な作動においてどの様な重要性を得るのかということである。) この様な差異図式を使用する観察の仕方は、日常的には「理解〔Verstehen〕」として表されていることにおおよそ対応する。[7]

自己言及 / 他者言及の形式はシステムを個体化する。このことは、自らの作動のみを方向づけこの作動をつねにまた自己言及的再生産の様態へと固定する様な内部形式が重要であるということに、すでに基づいている。しかし、このことはまた純粋に形式的には、形式の双安定性〔Bistabilität〕(訳注7)、つまり、その形式は自らの作動の継続のために二つの出発点を提供するということに基づいている。そして、その出発点は二つよりも多くもなく少なくもない。システムは作動という一価性には固定されていない。なぜなら、さもないとシステムは環境から区別されることができないだろうし、選択的なものとして、すなわち、弁別可能なものとして、観察者にとってのみ認識できることになるだろうからである。[8]しかし、システムは基本的な自己再生産の水準においてはまた、二つより多くの言及を自由に使用することはできない。すなわち、自己自身と環境への言及である。それ故、システムは、環境の複合性〔Komplexität〕(訳注9)を自己自

---

5 ここでは、同じ命題が社会システムにも当てはまるということには触れない。もちろんその際、この命題は他のタイプの作動に、すなわちコミュニケーションに当てはまる。

6 ここでは、アメリカの日常社会学による通俗的現象学と同様に、フッサール自身による意識の超越論的理論的解釈にも触れないことは言うまでもない。我々にとっては根源的な思考が問題なのである。これはもはやほとんど認識できない派生物に変化させられてしまっている。

7 この点について更に詳細には、Niklas Luhmann, Systeme verstehen Systeme, in: ders. und Karl Eberhard Schorr (Hg.). *Zwischen Intransparenz und Verstehen: Fragen an die Pädagogik,* Frankfurt am Main, 1986, S. 72-117.

8 このことは、自らを維持している有機体の観察に特殊化されている免疫システムや神経システム(訳注8)を含めて、全ての生命システムに当てはまる。

(訳注7) 「双安定性」とは、ここでは形式が二つの側をもつ形式であることを指していると考えられる。

(訳注8) 「免疫システム」や「神経システム」は有機体とカップリングしており、その存続が有機体に依存しているとともに、免疫システムは有機体の自己と非自己を識別して非自己から自己を守るために、また、神経システムは有機体の状態から作用を受ける際に、それぞれ有機体を観察しているということである。

(訳注9) 「複合性」は、「複雑性」とも訳される概念である。要素間の関係を考える際、要素の数が増大すると、各要素がそれ以外の全ての要素と関係することができずに、一部の要素のみが結びついているだけになる。その際、連関している諸要素の集合が、「複合的」であると呼ばれる。ここで、ある複合的な連関の関係の組み立てが、より少ない数の関係をもつ第二の複合的な連関によって再構成されるならば、複合性が複合性を「縮減」するとされる。社会システムや心理システムにおける複合性の縮減は、言及において生じる「意味」によって行われる。

身の中へ適切に模写するという誘惑にさらされていることは決してありえず、その代わりに二つの可能な言及方向の間を振動する。それによってシステムは、複合性を極端に縮減することはせず、その代わりに構造的に自らの複合性を構築することへと強制されている。それ故、各々の心理システムにとって世界は異なって見えるのである。

結局注意すべきことは、たとえ作動が一方の側と他方の側のどちらを表示していようと、すなわち、システムとその環境のどちらを表示していようと、自己言及と他者言及の区別は、システムの個々の作動において再生産されなければならないということである。どちらの側も他方の側がなければ不可能である。システムは何をしようとその形式を保持する。言い換えれば、システムは区別を区別として再生産しなければならない。しかし、境界と差異としての区別は、その区別の一方の側においても他方の側においても表示されることはできないので、システムは自らの形式を使用することはできるが、表示することはできない。それ故、システムは盲目的に自己を再生産しなければならない。なぜなら、システムは観察に対してつねにすでに、その形式の一方の側か他方の側を選択してしまっているに違いないからである。システムの統一はそのシステムにとっては接近不可能である。したがって、それ故にまた人格化に対する抵抗も存在しないのである。

システムが自己自身についてあるいは自己自身から「私」と言う場合、そのシステムはつねにすでにこの区別の一方の側を表示している。すなわち、そのシステムはその自己言及を顕在化し、他者言及を差し当たり言及されていないものとして伴っている。あるシステムが観察し、そこで自己言及 / 他者言及の区別を使用することができるようになったばかりでは、そのシステムはそれ自身だけではまだ、そのシステム自身が作動上閉じたオートポイエーシス的システム[(訳注 10)]としてあるところのものの半分にすぎない。確かに、再参入を再参入の中で繰り返すことは可能である、つまり、より高度な再帰能力を使用しまた自己言及と他者言及の差異を自らの成果として更に構成することができる様な側として、自己言及を際立たせることは可能である。ただし、このことは、システムから導かれることは決してないし、つねに一方の側が表示されている様な区別の設定における盲目性からシステムを解放することもない。

この自己言及 / 他者言及の形式が心理システムの意識過程を制御する一方で、それに対して精神分析は他の区別を、つまり、無意識的制御と意識的制御の区別を設定した。これは、不適切な仕方で定式化され、それ故勝手気ままな想像を引き起こした。無意識は、端的に否定的なものと同様に、存在し得ない。 ―ただし、観察図式のコンテクストにおいては、したがって、観察者の実際の状態としては別である。しかしもしかすると、メディア（＝「無意識的」）としての意識と形式（＝「意識的」）としての意識が区別されるという様に、基本的な考え方を再構築する

(訳注 10)「オートポイエーシス的システム」とは、マトゥラーナとヴァレラが提起した考え方によるシステムであり、要素が要素を生産するという生産過程のネットワークとして組織化されるシステムのことである。そこでは、①要素が生産過程のネットワークを絶えず再生産するとともに、②逆にその様なネットワークに位置づけられることによって要素は存在するという、回帰的な組織化が行われる。ルーマンのシステム理論においては、それらはシステムの「自己再生産」と「自己言及」によって行われるとされる。また、この様なオートポイエーシス的システムは、入力も出力もなく、作動上閉鎖的であるという特徴をもつ。

ことができるかもしれない。(訳注 11) メディアとしてならば意識は、可能な意識状態のゆるいカップリングであり、このカップリングは意味の両立性〔Kompatibilität〕(訳注 12) の境界によってのみ制限されるであろう。形式としてならば意識は、顕在化された意味要素の厳密なカップリングであり、このカップリングは思想として選び出され構造として記憶されるだろう。そしてそれとともに療法〔Therapie〕は、以前の生活におけるリビドー抑圧からリビドーの受肉にまで達する補助仮説を手がかりとして、他の形式構成を提案することとして把握されるべきだろう。ただし、それらの補助仮説が形式の変更に必要なもっともらしさを獲得することができる限りにおいてである。

たとえこの様に理論的再構成する場合でも、心理システムの形式が問題になるだろう。しかも、諸形式を形成しまた諸形式を再び解体しているシステムの形式に関わらなければならないだろう。意識されている形式も二つの側をもつ形式である。その形式は、意味諸要素のしっかりとしたカップリングによって、メディアとしての意味から区別される。このメディアを意識は、形式の選び出しに対する自らの可能性の非常に豊かな連結空間として自由に利用できる。そしてこの場合でも、区別されたものの中への区別の再参入の図が根底にあるだろう。なぜなら、メディアと形式の区別はそれ自身、自己自身の中に再び現れる形式だからである。

Ⅲ.

心理システムの形式問題をこの様に素描することは、心理システムと人格のあらゆる混同を予防するために必要であった。人格は自らの作動様態には関わらない同一化である。したがって、人格はシステムではない。古い用語法にならえば、人格性〔Personalität〕においては社会的相互作用の調整〔Regelung〕が問題なのである。[9]「persona とは身分の条件、各人が人々の間や市民生活の中で担う職務のことである〔Persona est conditio status, munus, quod quisque inter homines et in

---

9 Hans Rheinfelder, *Das Wort „Persona" : Geschichte seiner Bedeutungen mit besonderer Berücksichtigung des französischen und italienischen Mittelalters,* Halle, 1928. を参照せよ。法の伝統については Helmut Coing, Der Rechtsbegriff der menschlichen Person und die Theorien der Menschenrechte, in: ders., *Zur Geschichte des Privatrechtssystems,* Frankfurt am Main, 1962, S. 56ff. 神学への継受についてはまた Siegmund Schlossmann, *Persona und ΠΡΟΣΩΠΟΝ im Recht und im christlichen Dogma* (1906), Nachdruck, Darmstadt, 1968. 更に詳細には、*Historischen Wörterbuch der Philosophie,* Bd. 7, Basel, 1989, Sp. 269-338 における Person という見出し語の項目。

(訳注 11)「メディア / 形式〔Medium/Form〕」とは、心理学者のフリッツ・ハイダーによる概念である。ここでの「形式」とは「メディア」という用語と対比的に用いられる概念であり、スペンサー＝ブラウンによる「形式」概念とは含意されていることに若干相違がある。Giancarlo Corsi/Claudio Baraldi/Elena Esposit, *GLU: Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme,* Frankfurt a. M., 1997, S. 58 によれば、ハイダーはこの「メディア / 形式」という区別を、肉体と直接接触していない対象の知覚を説明するために用いているとされる。そこで挙げられている事例は視覚と聴覚であり、光あるいは空気というそれ自身は知覚されない「メディア」のおかげで、像や音という対象の特性としての「形式」が伝達されることになる。ここで、「メディア」とは要素間の緩やかなカップリングであり、「形式」はその様なメディアとしての要素間の結合を、固定的なカップリングに圧縮して、知覚されるようにするものである。

(訳注 12)「両立性」は「非両立性」に対する語であり、言語学においては語の結合関係における整合性についていうもので、語の共起関係を規定する選択制限との関係で問題になるものである。例えば、「ろばは干し草を食べた」は容認できる文であるが、「ろばは沈黙を食べた」は意味的に異常であり、意味的な特性に関して両立しないとされる。（田中春美他編『現代言語学辞典』、成美堂、1988 年、106 頁）したがって、本文で言われている意識における意味の「両立性」の境界とは、意識の要素である思想が連鎖する際に、それらの思想どうしの連鎖関係を意味的に制限する境界であると考えられる。

vita civili gerit〕」―その様に、ある辞典はローマの用語法におけるラテン語の単語の広義の意味をまとめている。[10] 例えば裁判の審理の様な、特殊な相互作用のコンテクストにおける役割や地位も意味され得たが、しかしいずれにせよ肉体としてまた魂として完全に個人化された全体としての人間が意味されたのではなかった。もし特殊な徴表を度外視しようとすれば、確かに時には古代後期において既に、人間的個体もまた persona という一般概念で表されることもある。[11] しかし、もしかすると人間的個体は、古代の「caput〔頭〕」と同様に、pars-pro-toto〔全体を代表する部分〕という言い回しとして理解されるかもしれない。中世に初めて、人間が一般的にその特殊な社会的コンテクスト領域〔Kontexturen〕(訳注 13) から自立して個人と表されるべきとされ、人格概念は一般的に個人に用いられることになる。それから、個人の価値上昇がこの概念を巻き込むことになる。法学は十七世紀以来〔個人に用いられる〕人格概念を採り入れて適合させ、その人格概念によって法的地位の身分制に縛られた配置から解放された。同様に、哲学的心理学は少し遅れて人格概念を使用し、神学によって占められていた心身二元論を克服する。明らかに今日この概念は、〔古代の〕伝統に対して距離をおく働きがあるために評価されている。個人を社会の中へ身分的に規定する包摂の特殊なあり様が消えるのに応じて、この人格という概念の〔個人を社会の中へ身分的に規定するという〕特殊な抽象化の働きに対する必要もなくなる。この抽象化の働きは、概念的ではなくとも、少なくとも術語的なものである。その際、もしかするとそれまで軽視していた〔人間的個体という〕副次的意味も保持しているかもしれない。〔しかし、古代においても中世以降においても〕いずれにしてもこの人格という概念は、個々人の具体的本性の個人的な唯一性を言い当てようとしているのではない。この概念はその意味に関しては集合観念であり続けている。あるひとが特に人格として表示されるならば、それに対応する〔非人格という〕反対概念を求めること、すなわち、あるひとがそれから本来的に区別されるものを求めることは、ますます困難となる。それでは人格は〔区別からなる〕形式をもたず、人格の内側は外側を持たないのだろうか。

〔上で再定式化した〕形式概念を手引きとして利用すれば、この複雑な伝統を今日の諸条件の下で再構築することが可能となる。そうすれば、「人格」を特殊な客体として理解することはできず、また客体の種あるいは客体の性質として理解することもできず（たとえその客体が「主体」の場合でも）、二つの側をもつ形式として観察を導くある特別な種類の区別として理解することができる。そうならば、人格は単に人間や個人とは別の対象なのではなく、人間的個体の様な対象を観察する際の〔人間や個人とは〕別の形式なのである。このとき最も重要なのは、この形式の他方の側が何であるかを見出すことであり、どの様な特殊な観点において人格は人間や個人でありつつ非人格となり得るのかを見出すことである。

---

10 Egidio Forcellini, *Lexicon totius latinitatis,* curante I. Perin, Neudruck, 1965, Bd.III, S. 677.

11 このことは、奴隷も人格として表されるという事例で分かる。

(訳注 13) Kontextur は、本文で後述される様に、ゴットハルト・ギュンターによる用語であり、例えば「存在」と「無」の様に、「排中律」によって二元的に区別された各領域を意味する。したがって、スペンサー＝ブラウンの「形式」における区別の一方の側に近い意味を持つ。「コンテクスト」とは意味が異なるがこの語を含むので、「コンテクスト領域」と訳しておく。ただし、本文のこの箇所では、「コンテクスト」とほぼ同様の意味で用いられていると考えられる。

〔複雑な伝統の再構築という〕この目的は、「人格」という形式が個人に帰属された行動の諸可能性〔Verhaltensmöglichkeiten〕の制限として規定されるとき、達成されうる。その際、ラルフ・リントンが取り入れた[12]属性的 / 業績的地位〔ascribed/achieved status〕の区別を問題とするべきでないし、しかしまたパーソンズによって「資質 / 遂行〔quality/performance〕」のパターン変数としてその区別が更に発展させられたことも問題とするべきでない。確かに制限に対する二つの根拠、すなわち、出自と業績は個人に帰属させられる。しかし強調点はむしろ行動の諸可能性の制限にあり、したがって形式は、この制限によって、あるものがもう一方の側として、つまり人格に帰属しないものとして、排除されるということにある。また、言語学的記号論において見られる有徴 / 無徴〔marked/unmarked〕の区別も助けになるかもしれない。[13]「有徴化」によって、注目すべきであり、更に明らかであったり、時には疑わしかったりするもの、―まさしく人格が、更なるコミュニケーションのために強調され準備される。その他のものは無徴の側に留まる。なぜなら、その他のものは、コミュニケーションの対象になることを期待されていないからである。それ故、非人格に属しているものは、編み物のほつれやビリヤードで穴をはずすことと同様に、未規定である。

形式概念の精確さに要求されていることは、〔一つには〕区別のもう一方の側に属しているが、しかしコミュニケーションの契機や通常の進行においては念頭に置かれていないものと、〔もう一つには〕区別それ自身によって排除されているものとを、慎重に区別しなければならないという点に示されている。この区別の基準を、我々は個人への帰属において見る。もう一方の側における非人格と見なすことができるのは、人格それ自身は表示しないが、人格に帰属させられるかもしれず、場合によっては人格ににじみ出るかもしれないものだけである。―例えば、評判の良い隣人の市民生活において長い間隠されている飛び地〔の様な性格〕や、もし目立つようになれば人格に加えざるを得ないてんかん発作の傾向等である。その他のものは全て世界における状態か出来事であり、人格図式の一方と他方のどちら側にとっても考慮されないものである。それは区別それ自身によって排除された第三のものである。別の言い方をすれば、一般に人格 / 非人格の形式図式において観察し、それ以外の仕方では観察しないという誘因〔Anlaß〕もまたつねに存在しなければならない[14]。それでは、この誘因があるとすればそれは何だろうか。

我々はこの問いでもって社会システムへの橋渡しをする。というのはその答えとは、社会シス

---

[12] *The Study of Man: An Introduction,* New York, 1936, S. 115 における。また、同じ著者の、*The Cultural Background of Personality,* New York, 1945〔邦訳ラルフ・リントン『文化人類學入門』、清水幾太郎・犬養康彦訳、東京創元社、1952 年〕も見よ。Ralph Dahrendorf, *Homo Sociologicus,* 3. Aufl., Köln, 1961, S. 38ff.〔邦訳 R. ダーレンドルフ『ホモ・ソシオロジクス : 役割と自由』、橋本和幸訳、ミネルヴァ書房、1973 年、83 頁以下〕における、この区別のその後の使用についての指摘。振り返るならば、この区別は近代社会よりも貴族社会の家系 / 美徳図式により良く当てはまると言うことができるだろう。

[13] John Lyons, *Semantics,* Bd. 1, Cambridge, 1977, S. 305ff.; Steve Fuller, *Social Epistemology,* Bloomington Ind., 1988, S. 155ff. を参照せよ。

[14] Spencer Brown, *a.a.O.,* S. 1〔邦訳 G. スペンサー = ブラウン、前掲書、1 頁〕は「動機〔motive〕」とさえ言うが、それによってただ形式の概念さえも形式であり、したがって他方の側をもち、その他方の側とともに形式の概念は何らかの第三のものを排除しているということを明らかにしているに過ぎない。

テムの成立を自己触媒する問題としての、社会的状況の二重の偶発性だからである。[15]（訳注14）二重の偶発性を伴う状況においては、あらゆる参加者は、他者が自らに対して満足させる様に行為するということに依存して、他者に対して自らの行動をする。その様な二重の偶発性を伴う状況においては、〔行動の〕諸可能性の自由な余地を制限するというやむを得ない欲求が生じる。人格の成立を誘発するのは、二重の偶発性のこの様な不安定で循環的な苦境である。あるいは、もっと精確に言えば、その様な二重の偶発性が、つねに人格において心理的に進行する関与者〔すなわち心理システム〕を、社会システムにおいてすなわちコミュニケーションにおいて人格として振る舞わせ、また、関与者の行動がもつ予期せぬ性質を適切に慎重に量るようにさせる。―たとえ、狭すぎる境界にぶつからない様に初めから広く見積もろうとそうであるし、他の可能性が役割に属さないものとして拒否されたり無視されたりできる様に分節化しようとそうである。[16]また、以下の様に社会的諸形式を扱おうとである。すなわち、人格自身が〔人格を形成する規律的な〕社会的諸形式から自らを取り戻し、その人格によって社会的諸形式の良い教育〔という側面〕のみが有利に示されているということが認識可能になる様にである。（この社会的諸形式には、〔そのことを認識していることを気づかせない様な〕ユーモアも含まれる。）

したがって、社会的状況の二重の偶発性という問題が一般に社会システムの形成に通じることになるのならば、諸人格はこの問題を解決する必要性の副次的効果として圧縮される。それ故に、予期の規律があり、行動レパートリーの制限があり、ひとがそうでありまたあり続けていると見せかけてきた〔人格への〕必要性がある。そしてそれ故にまた、心理システムが自由に利用できる〔人格と非人格からなる〕より広い諸可能性の枠内で、ひとがそちら側へ横断できるであろう〔非人格という〕もう一方の側が、共に念頭に置かれている。したがって、形式自身は〔心理システムの〕心理的欲求に役立つのではなく、―もう一方の言及とともに―全ての社会システムの諸問題を解決するのである。

それとともに、社会歴史的分析もまた開示されることになる。というのは、人格性が二重の偶発性の問題の解決に援用される範囲、とりわけありうる個人化の範囲は、全体社会システム〔Gesellschaftssystem〕の複合性によって異なるからである。それどころか多くの目的にとっては認識でき、場合によっては再認できる他者の肉体があれば十分で、それを知覚することによって何を予想しなければならないのか見積もることが可能になる。多くの社会は実際、肉体の装飾によって何が期待されうるかを伝え、それ以上の人格の形式を必要としていない。巡礼者が問題である場合、彼らは服装や身振りで見分けられ、彼らに何をする義務があるのかが知られる。それ

---

15 この点について詳細には Niklas Luhmann, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie,* Frankfurt am Main, 1984, S. 148ff.〔邦訳ニクラス・ルーマン『社会システム理論（上）（下）』、佐藤勉監訳、恒星社厚生閣、（上）1993年、（下）1995年、158頁以下〕

16 このことは、人格と役割を区別すること、そして、確かに人格はそうではないけれども、役割を個体化することを複合的な社会で意味のあることにしている。

（訳注14）「二重の偶発性〔doppelte Kontingenz〕」は元来パーソンズによる概念であり、ルーマンが継承したものである。二重の偶発性を伴う状況においては、自我も他我も自らの行為を相手の行為に依存させているために、行為の前提が循環的に連鎖してしまい、結局行為が自我と他我のどちらによってもなされないという状況に陥ってしまう。ルーマンによれば、この二重の偶発性を伴う状況が誘因となり、行為の可能性の条件を制限するという欲求が生じ、社会システムの成立に至るとされる。

から中世盛期に初めて、贖罪の気持ちがある本物の巡礼者が問題なのか、あるいは巡礼路の奉仕業務だけを無料で利用しようとする旅行者のみが問題なのかということも切迫した問題となる。[17] いくつかの目的のためにはつねに個体化された肉体だけで十分であるが、それ以外の目的のためにはそうではない。また、肉体的な見かけを当てにすることができるかどうか、また、どの様な観点で当てにすることができるか、また、人格性を構成するためには態度をどのくらい示したり確認したりしなければならないかは、状況に応じて様々に異なっているだろう。

人格がコミュニケーションにおいて不安定に存在するあり方は、遅くとも十七、八世紀以来、道徳の問題にもなる。それ以前は、個人の肉体的なまた心理的なレパートリーの道徳的規律化という意味で、エートスや態度のみが要求されていたとすれば、今ではコミュニケーション・パートナーの人格の保護へと道徳的要求は移っている。ますます個人的行動は解放され、それだけますます、ひとが他者の自己提示を社会的粉飾として見抜いていることを気づかせないことが重要になっている。礼節は重大な規制となり、ユーモア（特に自らに適用された）を発展させ安全弁として認める。したがって、会話の高度な規範とは他人に人格として気に入る機会を与えることであり、ひとが期待する様に、そのことはこの人格にそれに応じた代償で報いることになるだろう。また、肉体的のみならず精神的態度もまさに重要だからこそ、探りを入れる可能性は厳しく制限されており、実際に予想されうる様に、恋愛に関する事柄においてすらそうなのである。もっとも、その結果「自然らしさ」を巡って大変な努力が生じるということと、「本当らしさ」が目の前に突きつけられなければならないということは、〔見かけと実際の間に〕不一致が生じているということを表している。[18] 心理システムと人格を主体概念にひっくるめているので、両者を区別しない倫理はその様な繊細さを、無視するか、倫理的には不誠実なこととして軽視しなければならない。このことについて知りたい者は、ゴフマンを読むべきだろう。[19]

Ⅳ.

最後に心理システムに戻り、心理システムが人格という形式を受け入れなければならないならば、そのことは心理システムにとって何を意味しているのかということを問おう。もちろんそのことは、意識の心理的オートポイエーシスを何も変えない。そのことは次のことを何も変えない。すなわち、心理システムは二つの言及方向の間を振動したり、あるいはまた、しばらく自らを忘れて外界に留まったり、世界を忘れて自己自身に留まったりすることで、自己言及も他者言及も自由に使用してこの区別の統一を盲目的に再生産するということである。また、心理システ

---

17 この事例はFriederike Hassauer, Extensionen der Schrift: Textualität, Ritual und Raumvollzug im Mittelalter: Das Paradigma Santiago de Compostela: Fallstudie zu den Bedingungen der Möglichkeit medienhistorischer Rekonstruktion, Habilitationsschrift Siegen, 1989 における。

18 これについてはDean MacCannell, *Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings,* American Journal of Sociology 79 (1973), S. 589-603. 芸術においても、観察されることが描写において反省されることはないけれども、本当らしくする様な製作過程において、自己自身を観察可能にする努力が見出される。Niklas Luhmann/Frederick D. Bunsen/Dirk Baecker, *Unbeobachtbare Welt, über Kunst und Architektur,* Bielefeld, 1990, S. 46ff. における、フレデリック・ブンゼンの写真を見よ。

19 特に、差し当たりは古典的な文献である、Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life,* 2. Aufl., Garden City, N.Y., 1959〔邦訳 E. ゴッフマン『行為と演技：日常生活における自己呈示』、石黒毅訳、誠信書房、1974 年〕

ムが自己自身を観察することができるようにするためには、人格性は必要ない。それには、自らの肉体を外から見ることと内から（例えば重さや痛みの形式で）感じることができる限り、自らの肉体の観察があれば、差し当たり自らにつきまとう代わりとして十分である。たとえ外界に留まるとしても、意識は自らの肉体への構造的カップリング（訳注15）から解放されることはできない。つまり、肉体が動くならば、意識も伴に動かなければならない。それ故、意識は初めから自らの肉体と同一化しながら発展し、それ故にまた、ひとはあるひとが他の誰かではないということを素早くまた不可避的に学ぶことになる。

差し当たり一種の中間考察として、人格と肉体の同一化は、肉体が形式としてのみしたがって差異としてのみ与えられているという点において、最終的に失敗するということを確認しておこう。このことはもっと害のない仕方では、自らの肉体の可視的な外側の境界に当てはまり、この境界の向こう側では無感覚だが運動の可能性も始まる。このことはまた、人格を肉体の方から規定するために、特別な努力が企てられる場合にも当てはまる。有能なスポーツマンは勝利 / 敗北のコードの下にあり[20]、自らの肉体によってこの差異の一方か他方の側のどちらかにもたらされることを、喜びであれ狼狽であれ体験する。その際心理システムとしてこのスポーツマンは、この差異の統一すなわちその形式を受け入れなければならない—さもなければ拒絶してこの領域を去らなければならない。有徳な苦行者も全く同様な境遇にあったのであり、自らの肉体を苦しめることは苦行者に予期しない快楽を与え、その結果このことを体験した者は功徳から罪への急変をやむを得ず受け入れなければならなかった—さもなければ同様に領域を変え苦行をやめなければならなかった。[21] 自らの肉体に委ねられるそれ以外のそれほど重要でない形式も、この分析を立証している[22]。すなわち、肉体が人格になるべき時はいつも、肉体は形式を示し、二つの側を示し、ゴットハルト・ギュンターによる意味でコンテクスト領域として現れ、その際そのコンテクスト領域の側でより高次の論理的秩序による受容と拒否の決定の対象になる。[23] 二つの側を経験してきた後、心理システムは人格をより強く肉体から引き離すかもしれないし、そうせずに更に耐えるかもしれない。しかし、なぜ人格であることを固定させる形式において、この様なこと

---

20 この解釈は Uwe Schimank, Die Entwicklung des Sports zum gesellschaftlichen Teilsystem, in: Renate Mayntz et al., *Differenzierung und Verselbständigung: Zur Entwicklung gesellschaftlicher Teilsysteme,* Frankfurt am Main, 1988, S. 181-232 における。

21 これについては Alois Hahn, Religiöse Dimensionen der Leiblichkeit, in: Volker Kapp (Hg.), *Die Sprache der Zeichen und der Bilder: Rhetorik und nonverbale Kommunikation in der frühen Neuzeit,* Marburg, 1990, S. 130-140 を参照せよ。

22 これについては Karl-Heinrich Bette, *Körperspuren: Zur Semantik und Paradoxie moderner Körperlichkeit,* Berlin, 1989 と、次の重要なテーゼを見よ。すなわち、肉体の価値の上昇は、自らを肉体と同一化することをまさしく不可能にする。またこのことは、スポーツのボディビル、様々な形のダンディズム、下層階級のダンディズム（パンク）等の様に、社会的に目立つニッチで生じる場合も同様である。

23 Gotthard Günther, *Beiträge zur Grundlegung einer operationsfähigen Dialektik,* 3 Bde., Hamburg, 1976-1980, 特に、現実性と多コンテクスト領域性〔Polykontexturalität〕について第 2 巻でまとめられている諸研究を見よ。

（訳注15）「構造的カップリング〔strukturelle Kopplung〕」は、マトゥラーナからの概念である。マトゥラーナによれば、「二つ以上の統一体の行為において、ある統一体の行為が他の統一体の行為の関数である様な領域がある場合、統一体はその領域でカップリングしている」とされる。ルーマンはシステムと環境の関係を考える上で、「構造的カップリング」を「作動上のカップリング」に対する概念として捉え、「システムが環境のもつ一定の特質を継続的に前提し、それに構造的に依拠している」ことであるとする。ただし、システムは環境に対して作動上閉鎖的であり、両者は作動の上でカップリングしているのではない。

が生じるのだろうか。

人格という形式は、社会システムの自己組織化を除くと、参加者の行動レパートリーを制限することによって二重の偶発性の問題を解決することに役立つ。しかしそれは、人格という形式がコミュニケーションにおける虚構としてのみ機能し、心理的には意義を持たないということではない。確かに心理システムと社会システムは別々に作動し、つねにそれだけで作動上閉じている。それらの作動には交差はない（もちろん観察者は、意識の働きとコミュニケーションにおいて生じることを関連づけて、統一的なできごととして同一化することはできるけれども）。心理システムと社会システムの〔オートポイエーシス的システムとしての〕異なる回帰〔Rekursionen〕は両者の分離を強いる。[24] しかしそれは、〔心理システムと社会システムの間に〕実在的関連が成立せず、因果的な相互作用が可能ではなく、共同して進化することができないということではない。ここでの不可欠な関連は構造的カップリングによって媒介され、それは別々に作動しているシステムのオートポイエーシス的な自律性と全く両立する。[25]

構造的カップリングは相互浸透〔Interpenetrationen〕(訳注16) と興奮〔Irritationen〕(訳注17) を媒介する。構造的カップリングはその限りで両者の媒介を成し遂げるが、同時に相互浸透と興奮のそれ以外の行路を排除する形式として役立つ。「相互浸透」とは、オートポイエーシス的システムが他のシステムのオートポイエーシスの複合的な働きを前提とし、自らのシステムの一部の様に扱うことができることと理解されるべきである。したがって、あらゆるコミュニケーションは、〔意識システムに〕介入することはできないけれども、〔コミュニケーションに〕参加している意識システムの注意と記憶の能力を当てにしている。「興奮」とは、オートポイエーシス的システムが自らのスクリーン上で、撹乱、両義性、驚き、逸脱、不整合を、システムが働き続けることができる様な形式において知覚することと理解されるべきである。（ピアジェがこれらの代わりに同化と調節について語ったのは有名である。）相互浸透の包括化（一般化）はシステムの興奮性によって補われ、さもなければ非常に速く増大する同調からの逸脱〔Aus-dem-Gleichschritt-Kommen〕

---

24 これについて更に詳細には Niklas Luhmann, *Soziale Systeme,* a.a.O., S. 354ff.〔邦訳ニクラス・ルーマン『社会システム理論（上）（下）』、佐藤勉監訳、恒星社厚生閣、（上）1993 年、（下）1995 年、492 頁以下〕; ders., Die Autopoiesis des Bewußtseins, in: Alois Hahn/Volker Kapp (Hg.), *Selbstthematisierung und Selbstzeugnis: Bekenntnis und Geständnis,* Frankfurt am Main, 1987, S. 25-94; ders., Wie ist das Bewußtsein an Kommunikation beteiligt?, in: Hans Ulrich Gumbrecht/K. Ludwig Pfeiffer (Hg.), *Materialität der Kommunikation,* Frankfurt am Main, 1988, S. 884-905; 本書〔Niklas Luhmann, *Soziologische Aufklärung,* Bd. 6: *Die Soziologie und der Mensch,* 2. Aufl., Wiesbaden, 2005〕の S. 55ff. もしくは 38ff.

25 この点については Humberto R. Maturana, *Erkennen: Die Organisation und Verkörperung von Wirklichkeit: Ausgewählte Arbeiten zur biologischen Epistemologie,* Braunschweig, 1982, 特に S. 150ff., S. 251ff.

(訳注16) 「相互浸透」は、パーソンズによっても用いられていた概念であるが、ルーマンはそれを継承し、システムどうしの特殊な関係として再解釈した。ルーマンによれば、相互浸透においては、一方のシステムの要素が他方のシステムによって規定され構造化されるという関係が互いに生じている。意識システムと社会システムの相互浸透においては、意識システムによる情報処理や行為が社会システムの要素であるコミュニケーションを構成するために使われるとともに、逆に社会システムにおけるコミュニケーションが心理システムの要素である思想を構成するためにも使われる。ただし、両システムはそれぞれオートポイエーシス的システムとして作動上閉鎖的であり、一方のシステムの作動が他方のシステムの作動に介入するということではない。

(訳注17) ヘーゲルにおいては、感受性、再生産とならんで動物的有機体の概念を構成する三契機の一つとして、Irritabilität が「興奮性」と訳されることから、Irritation も「興奮」と訳しておくことにする。ルーマンによれば、興奮はシステムの知覚形式であり、しかも、環境に相関物をもたない知覚形式である。システム自身は興奮を、自らの構造のスクリーンの上にだけ記録するとされる。

から保護される。それ故、全体的効果の中でオートポイエーシス的システムは、つねにすでに環境に適応して作動する。なぜなら、オートポイエーシス的システムは、相互浸透と興奮性によるこの二重の装置を通して、実在的な諸可能性の区域の中で維持されるからである。またこのことは、たとえシステムの自己変動のオートポイエーシス的自律性と構造決定性が、相互浸透と興奮性によって妨害されるということがなくても生じる。それは結局システム自らの作動に基づいて生じるのである。

この様に回りくどい形でのみ獲得されることができる概念装置を必要とするのは、それで次の様に言うことができるようにするためである。すなわち、人格は心理システムと社会システムの構造的カップリングに役立つ、と。人格によって心理システムは、どの様な制限が社会的交流において当てにされているかを自らの自己において経験することが可能になる。[26] 人格であるという意識は心理システムに、正常な場合は社会的承認を与え、逸脱している場合はシステムにおいて更に操作可能な興奮の形式を与える。意識が人格としての自己自身に困難を生じさせる場合、意識はいわば注意を払い、それによって逃げ道を探す機会をもつ。〔心理システムにおける〕自己言及 / 他者言及の区別による自己概念は、人格であることによって制限され、〔人格という〕他の形式によって変形される。それは、〔変形して〕醜くなったり、〔自己から〕疎外されたりするという意味ではなく、更なる区別が付け加えられたり、他の形式となったり、境界を横断して反対に移行する—あるいはそうすることを避けるという他の可能性があったりする、という意味なのである。

人格であることが、差し当たり自由でルソー的な自己を社会的な強制に服させると言うのならば、それは上述の事態を端折り歪曲して描写することになる。たとえ、心理的機会と社会的機会を取り換えることは、せいぜい有利なことがあるとしても、大抵は不利であるにせよである。ここで提案された形式概念はより複合的な洞察を可能にする。「人格」という形式は更なる区別、すなわち、制限された行動レパートリーとそれによって排除された行動レパートリーとの区別によって、心理システムを変形させる。ひとは〔心理システムとして〕心理的にはこの区別の両側を見ることができ、人格に忠実に一方の側に留まることも境界を横断することも楽しむことができる。意識が自分からそうできない場合は、他方の側に至るためにドラッグを摂ることもできる。また、自分以外の人物の振りをしたり、休暇を取ったり、お忍びで旅をしたり、バーで誰も確かめられない様な話をしたりする誘惑を感じることもできるし、[27] あるいはぞっとしてその様な自己逃避から後ずさりすることもできる。人格であることはその両方を可能にする。なぜなら、人格であることは形式だからである。

---

[26] ここで我々は、社会的強制の内面化についてのイメージ等で、良心の理論の隣接分野でとうに開拓されている領域に、再び辿り着いた。システム理論の複合的で理論的な働きが持ち込まれて変わるのは、とうに知られていることを繋ぐことが可能な際のその文脈化と範囲だけである。

[27] 特に、この可能性については Sherri Cavan, *Liquor License: An Ethnography of Bar Behaviour,* Chicago, 1966.

付記

ここに訳出したのは、Niklas Luhmann, Die Form „Person“, in: Niklas Luhmann, *Soziologische Aufklärung,* Bd. 6: *Die Soziologie und der Mensch,* 2. Aufl., Wiesbaden, 2005 という論文である。初出は、雑誌 Soziale Welt 42, 1991, S. 166-175 である。

当論文が収められた上記のニクラス・ルーマンの論文集は主として、原著者の専門研究対象である社会システムと、意識ないしは心理システムとの関係を主題的に探求した論文を集めたものである。当論文では、特に「人格」という形式に焦点が当てられ、システム理論に基づいた考察が行われている。

近年、「主体」の問題は何かと話題にされるところである。当論文は短いながらも、この問題に関わる社会システムと心理システムの関係について、ルーマンの基本的な立場を把握することができるものになっている。全体を概観するならば、まず第一節ではスペンサー＝ブラウンの「形式」概念が紹介される。次に第二節では心理システムにおける形式が、第三節では人格における形式がそれぞれ考察され、両形式は異なり、人格はシステムではないとされる。そして最後の第四節では、心理システムと人格の関係が説明されている。

また、システム理論における多くの主要概念もコンパクトにまとめられ、システム理論の基本的な考え方も理解することができるものとなっている。ただし、それらの主要概念の理解が前提とされているために、議論の抽象度がやや高くなっている感がある。そこで訳文に関しては、原文に忠実な訳を心掛けたものの、文意を明らかにするためにかなりの補足を加えたり、意訳を施したりした箇所がある。

1. 脚注において、1、2 …は原注を、（訳注 1）（訳注 2）…は訳注を表す。
2. （　）は、原文中に見出されるものである。
3. 〔　〕は、訳文に添えた原文の語、あるいは、訳者が加えた補足である。

（まえだひであき　哲学哲学史・博士後期課程）

Title: Die Form „Person“, in: Niklas Luhmann, *Soziologische Aufklärung,* Bd. 6: *Die Soziologie und der Mensch,* 2. Aufl., Wiesbaden, 2005
Author: Niklas Luhmann
©2005 VS Verlag für Sozialwissenschaften/GWV Fachverlage GmbH